

安東よりの逃避

兵庫県 長池謙一

昭和二十年七月になると、北滿方面から日本人が列車でぞくぞく南下し、安東はたいへんにこん乱をきわめた。中国人は、当時すでに日本の敗戦を知っていた。したがって、治安は日ごとに悪化し、終戦の詔勅が下ると、悪質なデマが飛び乱れ、野盜が続出した。安東在住の邦人は、日増しに不安な毎日を過ごしていた。やがてソ連軍が進出してきた。土足のまま人家を物色し、家の中にしのびこみ、時おり、ラジオ、毛布、食料品など目ぼしい物を持ち去った。ソ連につづき、中国国民党軍が街にやってきた。政治活動を始めた。私が元満州国官吏の職業であったことを理由に「武器を持っているだろう」という嫌疑で工作隊員数人により家探しを受けた。さいわい私は外出中であつたので逮捕を逃れた。上司や同僚の多くはこの当時逮捕された。銃殺されたもの、長期監禁、

または強制労務に従事するなど生命の危険にさらされた。このような状況下にあつて、毎日不安な生活におびえていた。朝早く家を出て知人の宅に避難し、夜遅く自宅に帰るなど身辺の警戒と保全に心がけることとした。

終戦の詔勅が出た日から糧道をたたれた。家族たちは今後どうして生きのびるか、という重大な問題に遭遇した。中国国民党に代つて、中国共産党がこの地方の政治を握った頃から治安もぼつぼつ回復してきた。その頃から妻子とともに身にぼろ服をまとい、生活費をもとめるために働くこととした。酒を売ったり、葉やサッカーリンなどの行商をした。また古い屋台を路傍に出して、タバコ、人形その他日用品などを販売した。幼い子どもたちも屋台に立って手伝った。このような生活を続けながら、昭和二十一年十月の始め引揚げ命令がでるまでの間、約一か年いわゆる難民生活を続けた。

引揚げは安東から旧満鉄安奉線に沿いきびしい山道を三日間徒歩で奉天にたどりついた。その間山中の農家で二泊したが、暴民から再三にわたり毛布、現金、衣類等が奪われた。丸裸の姿で、安東出發後四十日、奉天から

コロ島を経由し、博多港に引揚げた。

引揚げ後は、しばらく郷里にいて、心身の保養と再起をはかるための情報の収集とその準備にこつこつとした。元より手持金は引揚げ家族一人あたり千円也の引揚げ手当が唯一の財産。住宅、食料、生活器材の確保と冬に向かつての衣料、寝具、燃料の用達など引揚げ者には生命にかかわる重大な対策に難渋した。まず「その日をどうして食べるのか！」こうした苦行が引揚げ後の生活のすべてであった。引揚げ後四か月過ぎ、ようやく体力を回復したので、就職したが、引揚げ者に冷たい職場のふんい気にずいぶんわずらわされた。インフレ急進のなかで給料を貰っても、わずかな食料の配給料金にすら不足する状態であった。いったいどうして引揚げ当時の家計の切盛りを行ったのかこの苦情の時代の生活を支えた妻の強靱な意思と生活の知恵に感謝をするのみである。

三人の子と涙の逃避行

兵庫県 小南 艶子

昭和十五年、大陸の花嫁として国策にそって渡満しました。主人は龍爪開拓協同組合に勤務。何不自由なく、広々とした広野で、楽しい生活を過ごし、三人の子どもにも恵まれ、六年間は夢のようでした。いうことのない生活だと思っていたのに、昭和二十年六月、主人に召集がきました。八月、ソ連の戦車が林口まで侵入してきているからと、子ども二人がいるため、何も持つことができず、八月十五日に家を出て、皆さんといっしょに歩けばと食事もろくになく、集団から遅れながらついて行きました。

すると、そこまでソ連軍がはいってきているとのこと、山に逃げ、野宿をしながら歩き、行けど行けど集団の列から遅れ、やっと追いついたら出発準備、たとえ一人でもと思って腰をおろして子どもを休ませ、両ひざに